

次第に減ってきていると聞いている。このような時期に中国を中心とした道・仏教文化の一つである籤・葉籤を集大成した貴重な書物があらわされたことは慶賀の至りである。出版元である風響社の御英断に敬意を表すものである。

なお最近、靈籤に関しては酒井忠夫他編の『日本・中国の宗教文化の研究』（平河出版社、一九九一年）が、葉籤については吉元昭治著『道教と不老長寿の医学』（平河出版社、一九八九年）が出版されている。共に大変参考になる書物である。

（難波 恒雄）

〔風響社・東京都北区田端四―一四―九、電話〇三―三八二八―九二四九、一九九二年六月一八日発行、A四判、五五六頁、定価八七五円〕

福田真人著『結核の文化史』

この本を読んで、私は日本における結核は戦後の抗結核剤、SM、PAS、INHの開発により一挙に解決したものと理解していたが、改めて病気の盛衰は単に人間と病気との戦いによるものではないという認識を持つことができた。

つまり、ペスト（黒死病）が十四―十七世紀にかけて欧州では猖獗を極めたが、一六六五年のロンドン大疫病を最期に、突然なんの効果的な治療法もないままに終息したし、ロンドンの結核死亡率の変化は、従来一般に信じられてきたのとは異なつてコッホが結核菌を発見した一八八二年よりも以前に

死亡率の低下が始まっている。日本における結核死亡率の変化についても結核菌の発見後も有効な治療法がなかったために、患者の増加はなお勢いを緩めることはなかった。結核療養所、外科手術、BCG、集団検診などロンドンの結核ではなかった様々な療法もさしたる効果もなく、戦争という社会情勢の変化は結核患者を逆に増やしている。しかし、戦後化学療法の登場以前に結核死亡率は減少しはじめていた。

これらを総合して考えてみると、結核死亡率の変化は自然の大きなメカニズムが働いていると考えるのが妥当であろう。結核死亡率の減少が近代医学の勝利であろうとする従来の医学観に反するが、著者はこのようにふりかえっている。

産業革命のロンドンにおいても、近代化にめざめた日本においてもそうであったのだが、病原菌があるだけで病気が生じることはなく、それを伝播、繁殖させる条件が揃って、はじめて病気となる。その条件とは自然条件にくわえて人間がつくりだした条件が少なくない。つまり文明と文化である。人口の増大、都市化の進行、貧富の拡大、産業の発達、労働条件の変化により稀にしかみられなかった結核が急速に蔓延したものである。結核が近代的病気といわれる所以である。

比較文学専攻の著者は近代日本の結核の文化史を殖産工業としての日本の工業化と結核の伝染を女工哀史などをめぐって述べ、コッホの結核菌発見の頃の日本の状況を述べたあと結核のロマン化をとりあげている。わが国では徳富蘆花の「不如帰」が文学作品として登場した。これによって明治以降の

日本における肺病が恐るべき病氣、死に至る病であったという現実とは裏腹に決定的にロマン化されて、はかない運命の女性が美しく蒼白くやせ細って死んでいくことが、人々の胸に深い印象を残した。そして肺病、つまり結核がいつも重要な役割を果たしたために恋愛や佳人薄命といった言葉が結核という病と不可分のものと見なされるようになった。肺病は貴顕な人々、上流階級の人々の病氣であると信じられていたし、また芸術的創造、学問的研究という点においても、他の人々より抜きん出ているために天才の病とさえ考えられたのであった。貧困、苦渋、長患い、苦痛という負のイメージをのりこえて、肺病にまつわる肯定的なイメージをつくり出していたのである。肺病が日本中に蔓延していく過程で、病にたいする恐怖の増大とともにロマンチックな夢とイメージが堀辰雄や立原道造といういわばサナトリウム作家に受け継がれた。甘美でロマンチックなイメージというのは肺病に特権的なものであった。

他の疾患では病そのものをこのようにロマン化するということは考えられないので、特異な文化的要素をもつものと考えられる。

最期に療養の歴史的経過にふれているが、佐々木東洋訳『内科提要』（明治一〇年）、肺臓結核の治療でも結局無力なことから、種々の民間療法が後を絶たずに行われていたし、ついで転地療法の有効性が世間に広まったために、高山樗牛などは転々と転地を試みたが肺病を根治することは出来なかった。

サナトリウム療法は、従来の治療にかわって新鮮な空気の中で専門医が管理するのがよいとした。安静療法、食餌療法に期待して、効果の少ない薬剤を服用しながら療法が続けられた。堀辰雄の小説の世界はその辺の様子が詳しく書かれている。しかし薬物療法や外科療法の改良がもたらされると共に抗生物質の登場で、療養所は次第にその存在意義をなくしていった。

医療者の立場からでなしに、著者は比較文学の体系の中から、結核のロマン化にあずかった文学者盧花、堀辰雄などをあげ、結核の側面を文化的に観察している。明治以降様々な療法が取り上げられながら、結局さしたる効果もなく外科療法さえも、その出現に席を譲らなければならない抗結核剤の登場によって、歴史は一応のしめくくりをつけることになった。

しかし実際には結核の歴史としては、その前に明らかに減少の傾向にあったのである。ひとり結核だけでなく、あらゆる疾患の歴史を深く調査、研究することで新たに出現してくる疾患への対応をより適切にすることが出来るという暗示にみちた本といえよう。

（藤倉 一郎）

〔名古屋大学出版会・名古屋千種区不老町名古屋大学構内、電話〇五二一七八一―五〇二七、一九九五年二月発行、四六判、三九八頁、四六三五円〕